

三. 汗と泥

日ごとにやわらかみを増してきている朝日が水を打った舗道に斜めにさしていた。圭介と川村は連れ立って角屋を出た。裏通りを抜けて駅前広場へ出る間に、自転車が次々と追い越していった。圭介は小ざっぱりとしたカーキ色の作業服を着ていた。

工事で現場に入っている時はいつもそうした。もちろん通勤用と現場用とは分けている。作業服は物を作り出す者の象徴であり、誇りである。そんな気持ちも少しはあったが、遠い土地に来て、見知らぬ人たちの間にいることが圭介の気持ちからこだわりをぬぐい去っていることのほうが大きかった。

川村はわりあいおしゃれで、現場以外で作業服を着ることはなく、黒いジャンパーとグレーのスラックスを通勤着としていた。

U市は県南部の中心である。駅は国道のすぐ近くにあり、駅前広場はバスターミナルになっている。U市がすでに東京への通勤圏に組み込まれているため、駅前広場は朝早くから人々でごったがえす。圭介たちが駅前に現れる頃にはバスがひっきりなしに到着し、群衆を駅構内に送り込んでいる。

圭介たちは構内の売店でスポーツ新聞を買って改札口を通った。電車の二駅は十分もあれば充分だ。間もなく二人は駅前で待つ工場のマイクロバスに乗り込んだ。高瀬は既に車中の人となっている。マイクロバスに乗り込む圭介に助手席の高木が声を掛けてきた。

「真藤さんもいろいろ苦労されますなあ。今度は大分長くなりそうですな。問題が多いようですし」

「はあ、あと二週間くらいの予定なんですけど……」

「うまく片付きますかな、そのくらいで……」

高木は白い歯を覗かせて、独特の皮肉たっぷりの笑いを見せた。相変わらず秋山からの苦情が多いことは、川村の話から圭介も知っていたが、いずれも大した問題ではないと思っていた。バスは既に走り出している。

「はあ、何とか……」

それだけ答えて、圭介は川村を見やった。川村は無関心の横顔を見せて窓外の景色を眺めていた。

高木はすぐ後に座っている若い男と世間話を始めた。それに時々女子事務員が加わる。外来者の三人は彼らの声を耳にしながら、黙って車外に流れていく関東平野の風景を目で追っていた。

始業前のハウスのひと時には朝のくつろぎがあった。着替えをしながらの雑談がしばらくにぎやかに続く。着替え終わった者はスポーツ新聞を開く。遅れて着替えた者が新聞の中側のページを要求する。こうして皆が新聞を読み始めるとハウスの中のざわめきがしばらくの間おさまる。

新聞のページをめくる音と、読み終えたページを交換する音とが空間を交叉する。間もなく電熱器の上で沸き出した湯の音がこれに混じる。そのうちに読み終えた者がコーヒーを入れ始める。誰が決めたというわけではないが、北山の配下の若者と川村の二人がいつもその役に当たっていた。

カップが皆に配られる頃には新聞は机の上に投げ出される。コーヒーをすすりながらの雑談の話題はプロ野球の優勝の行方であり、競馬の予想である。

こうして八時十五分頃になると、一人、二人とハウスを出て行く。最後はいつも川村だった。その日の人数を確認して事務所の庶務係の女性に昼弁当の数を告げるのが、彼の一日の仕事の始まりだった。

事務所の横手の通路を現場に向かう川村の背中に朝陽が斜めにさしていた。ほとんど風のない日だった。杉の林は日陰の側をこちらに向けて黒々としていた。路面を移っていく川村の影には秋の陽のやさしさがあった。やさしい光は油で汚れた川村の白いヘルメットにもやわらかく降り注ぎ、それを鈍く輝かせた。

一日の始まりにふさわしい朝だと川村は感じていた。真藤圭介と一緒にいることが川村の心に安堵感をもたらしているのだった。川村の姿が壁の内に消えると、外には自然の営みに身を委ねている世界だけが残った。

昼も間近になった頃、川村は減速機の基礎ボルトの埋め込み作業に立ち会っていた。竹峰工業の三人が作業をしていた。一人がセメントと砂利と砂をミキサーに放り込んでこねた。残りの二人がそれぞれ一輪車を操って、こね上がったモルタルをボルトを固定した四角い堅穴に流し込んだ。川村は、ミキサーに材料や水を入れる時にちょっと手を貸すくらいで、大方は腕組みをして作業を見ていた。

ピットに渡した板の上を一輪車を押して通るのは、微妙なバランス感覚と慣れを必要とした。側で見ているといかにも軽快に操っているように見える一輪車も、モルタルを積むと相当重く、初めて扱う者は倒すまいと思うがために腕に必要以上の力を入れるのだった。

圭介はライニングの出来映えを点検していた。ベースと壁板の間の溶接と角部の溶接が大事な所である。懐中電灯を握り、ワイヤーブラシで溶接部を引っ掻きながらビードの具合を見ていく圭介に北山が声をかけた。

「うまくできてるだろう。そんなに細かく調べなくても大丈夫だよ」

圭介はブラシの手を休めて振り返り、にやっと笑った。

「これがおれの仕事やもん、しょうがないよ……」

北山も髭の下に白い歯を見せて笑った。三日後に水張り試験を始める予定だった。あと二日で残りを仕上げるために、北山は忙しいはずだのにと圭介は思った。

減速機四台のうち一台分の基礎ボルトの埋め込みが終った時、十二時のチャイムが鳴った。地下のオイルセラーから配管工たちが上がって来た。本体の中に入り込んで部品を取り付けていた高瀬の色白の顔がのぞいた。川村はピットの中に声をかけて、壁のターミナルボックスの方へ歩いて行った。無造作に扉を開いて溶接機のナイフスイッチを二つ切り、竹峰に向かって叫んだ。

「ミキサー切ってもええかあ」

ミキサーを傾斜させて中のモルタルを全部鉄板の上に出してから、竹峰は親指と人さし指で円を作って川村に合図を送った。ミキサーが止まると工事現場は静かになった。南側のベニヤの壁の向こうからは相変わらず機械の運転音が響いていた。材料が一本終るまで職工たちの昼休みはお預けになるのだった。

長時間屈み込んでいた圭介は、ライニングピットから這い上がると大きな伸びを二つした。それから川村や高瀬と連れ立って西側の裏通りへ出た。秋が深まって来ているとは言え、地底で長いこと俯いていた圭介の目には、高い所から注ぐ真昼の陽射しは眩しかった。風はほとんどなかった。それでもハウスの裏の雑木林は半分枯れかかった葉を揺らめかせているようだった。

ハウスでヘルメットを脱ぎ、圭介は再び外へ出た。ハウスの横で何度も身体を曲げ、そして振った。体操を終えてふと見上げた圭介の目に、雑木林を透かして秋の空が映った。淡い色の空は清澄さをたたえ、空を背景にして木々の梢の葉がひらひらと軽やかに動いた。心の中に何かがよみがえってくるような気持ちを味わいながら、圭介は少しの間そのまま立ち尽くしていた。

工事屋たちは十二時十五分過ぎくらいに従業員食堂に現れる。その頃には大方の工場従業員は既に昼食を終えている。昼食は赤いプラスチックの二段積みの弁当箱に入って、食堂入り口脇のテーブルの上に積んである。工場長から職工の見習いに至るまで、皆赤い弁当箱と湯呑とはしを入り口で受け取り、空席を求めて空間に視線を泳がせる。食事を終えた従業員たちはそれぞれの遊びや休息に散っていく。

表通りを挟んで食堂と「向い合っている防火水槽前の芝生は団らんと休息の場と変り、表通りはバレーコートになる。事務所の横手の通路がゴルフクラブの素振り場である。

工事屋たちの姿が表通りに現れても、人々は気にも留めずに、バレーボールや雑談

に興じていた。底と爪先を鉄板で補強した作業靴を引きずる音が遠慮がちにバレーボールの脇を通り過ぎていった。

カーキ色の作業服を着た工事屋たちの姿は構内では容易に見分けることができた。従業員たちの服装は明るいグレイで、男たちは上着とズボン、女たちは上っ張りである。従業員の服装が小ざれいなのに引き比べ、工事屋たちの汚れはひどい。泥と汗と油が染みた作業服は洗濯してもまだら模様が残った。

食堂に入ると、こまめな高瀬が走り回って弁当をテーブルの上に並べた。従業員の姿はほとんどなく、昼の演芸番組の流れているテレビの前にいた二人の女性が、ドタドタした靴音に思わず振り返った。一人は現場にたびたび顔を見せる娘だった。川村や圭介に会社から電話が入るとその娘が現場まで呼びにきた。秋山や高木に事務所へ呼ばれる時もその娘がそれを伝えにやって来た。

彼女が振り返った時、圭介は軽く会釈した。彼女は大きな目をクリクリッと動かして口もとで笑うと、再びテレビの画面に視線を戻した。

食後の一服に火をつけた圭介の前の空の弁当箱を川村が手に取った。「すまん」と言った圭介はくわえたセブンスターの煙に顔をしかめた。高瀬がコーヒーの紙コップを手にしてテーブルに戻って来るのを見て、圭介は川村の背中を追いかけるようにして「コーヒー飲むかあ」と叫んだ。振り向いた川村の顔に同意の色を見て、圭介は立ち上がった。

事務所の横手の通路に面した窓から射し込む黄色い光は、自動販売機の前に立つ圭介のすねから下を明るく浮き上がらせていた。圭介は靴の中にまで陽のぬくもりを感じていた。

通路でクラブを振る人たちの中に高木がいる。窓に背を向けているのは秋山らしい。高木が手を休めて、隣で一生懸命振っている男に何か言った。男は頷くだけで、手を休めずにクラブを振り続けている。高木の大きな目が圭介の方に向けられた時、圭介は思わず会釈した。高木は表情に何の反応も示さず、再びクラブを振り始めた。高木の所からは、暗がりになった自分の顔が見えるはずがないことに気づいて圭介はばつの悪い思いで周囲を見回した。

二人の娘たちの目は相変わらずテレビに向けられていた。高瀬は紙コップを前にしたまま、目を細めて窓外のバレーボールを眺めている。高瀬の口から吐き出される煙が天井に上っていく。

両手に一つずつ紙コップを握って圭介はくわえ煙草で戻ってきた。煙が目に浸みて目尻と額にしわが入った。コーヒーを置く圭介に川村が言った。

「いま歌っとるあの歌手な、おれが中学の時、同級生やった。あの頃から“いかれぼんち”やったなあ。学校に隠れて親衛隊の子たちを引き連れて、ゴーゴー喫茶なんかに入りびたってたもんな。それにしても出世したもんや」

「川村さんも結構有名人と知り合いやんか」

圭介は川村を見てニヤッと笑った。圭介の向かい側に座っている高瀬が感心したように「ほおっ」と言いながら顔を二、三度上下に動かした。テレビの画面の中で細面で目の大きい痩せた娘が黄色いロングドレスを着て歌っている。やや鼻にかかった低めの声を持つ彼女の歌は、この雰囲気になじまないようだった。

テレビを消して二人の娘たちが出て行ってしまうと、食堂に残っているのは圭介たち三人だけになった。窓から射し込む黄色い光が床にくっきりと影を描いている。表通りの方からは、バレーボールに興じる男女の声が入り混じって柔らかく聞こえてくる。三人はそれぞれ勝手に目をつぶり、目を細め、煙を吐き、コーヒーをすすする。秋の午後のけだるい流れが無言の三人を包み込んでいる。

川村たちが二台目の減速機の基礎ボルトに掛かろうとしている時、秋山が現場にやってきた。

「真藤さんは何処かいな」

「真藤さん、ちょっと上がって来てや」

川村がピットの中に向かって叫んだ。ピットから這い上がった圭介を、秋山は減速機の所へ連れて行き、未だモルタルを入れていない穴の中を指した。

「あれでええんかなと思って、さっき覗いてみたんですけどね。大丈夫ですかね」

「うちはもともと基礎をうつ時に配筋にボルトを固定する方法を推奨したんですけど」

「いや、それはよう解ってます。箱穴抜きでやると言うたのはうちのほうですわ。ただその時にうちの高木が言うのとたでしょう。箱穴の下の方を少しはつって広げて、配筋を露出させてからモルタルを入れようって」

圭介は覚えていた。確かに秋山の言う通りだった。既に一台分はモルタルを流し込んでしまったことが圭介の頭の中に重く滞っていた。すでにモルタルを流し終えた分は他の三台に比べて馬力も小さいから大丈夫だろう、何とかこのままにしてもらえないだろうか、他の三台は要求通りにやるということで秋山の了解を得ようと、圭介は思った。意外にも秋山は圭介の申し出をあっさりと了解した。

圭介が秋山との話の内容を川村に告げると、傍らで聴いていた竹峰が露骨にいやな顔をした。立場上直接竹峰に仕事の指示を出すことのできない圭介は、先ず高瀬か川村に話をしなければならなかったのだ。

「すまんが竹さん頼む」

川村は本当に申し訳ないという顔をして、竹峰に向かって手を合わせた。竹峰は

無言だったが拒否もしなかった。圭介と目が合った時、「断われねえのかい」とだけ言った。

配筋の深さを調べに土建業者の所へ行っていた秋山が青い顔をして戻ってきた。頬がこわばっているのが立ち話をしていた三人にもわかった。

「えらいこっちゃ、配筋が入っとらんのや。配筋なしではほんまにあかんやろか。なあ真藤さん」

「まずあかんでしょうね。まあ一度本社に電話を入れて検討してもらいますけど」

そう言って圭介は高瀬を呼んだ。高瀬に問題の要点を話してから圭介は電話をかける事務所の方へ歩いていった。

圭介の電話を受けた河島主任の答は、「そんなもん保証できん」の一点張りだった。大きな力を受ける基礎面には鉄筋を入れるのは当然のことだ。検討するに値しない問題だと河島は言った。掘り返して配筋するように要求しろと河島は圭介に命じた。その言葉に圭介は、突き放されたような寂しさを感じていた。

圭介が現場に戻った時、三人は顔を寄せて対策を練っていた。三人の顔が一斉に圭介の方を向いた。その視線に込められた期待感が圭介の身体を刺し貫くようだった。

「だめや」

圭介の一言で三人の期待は砕け散った。

「掘り返して配筋しなければメーカーとしては保証できません」

圭介は努めて感情を押し殺し、冷たく言い放った。

この時秋山はある決心をしたようだった。

「今、川村さんと話していたんやけどね、ピット沿いには配筋があるんよ。箱穴を下広がり掘って配筋を入れて、ピット側だけでも既に入っている配筋に溶接すれば何とかいけそうかな、とね」

秋山は顔を紅潮させて早口に喋った。圭介は何とも答えることができず、黙って秋山の顔を見つめた。高瀬は沈んだ顔をして俯いた。

「今からでは、その方法以外は無理やと思いますね」

誰に言うともなくぼんやりとした口調で川村は言った。圭介は表情をこわばらせて無言だった。河島の言葉が冷たく心に響いていた。

「うちサイドで責任は取ります。他にもう方法はないでしょう」

秋山の言葉が圭介の心を解いた。責任がこちら側に押し付けられる限り、河島が了解しないことは解り切っていた。安堵の気持が広がっていく中で、圭介は秋山の苦しい心にも触れたのだった。

「高木課長の承認が要るんでしょう」

「後で了解してもらいますよ。どうせこれしか方法はないんだし、うちのチョンボ

だし・・・・・・・・」

減速機をどけて、流し込んだモルタルを取り出したら、あとは土建屋に掘らせるから、と言って秋山は事務所へ帰っていった。

裏通りへの出入り口で川村がハウスに向かって手を上げた。待機していた竹峰組の三人がそれに応じて立ち上がった。ようやく仕事をやらせてもらえると思った竹峰は現場に入って来るとスコップを取り上げた。

「竹さん、ちょっと待ってや」

川村がそれまでの経緯を説明して聞かせた。話しが進むに従い竹峰の表情は陰しさを増していった。説明が最後の段階に入ると、竹峰はとうとう怒り出した。

「むこうがドジ踏んだんじゃねえかよ。そんな仕事できるかっ。やつらにやらせろっ」

「まあまあ、そうは言ってもなあ・・・・・・・・」

川村がなだめたが竹峰はきかなかった。

「おれはいやだっ。あんたたちでやってくれっ」

顔を紅潮させて竹峰はスコップをコンクリートの床に叩きつけた。ベニヤの向こうの機械の唸りをバックにして、金属の激しい衝突音が飛び散った。窓際まで歩いて行って腕組みをして立った竹峰の唇がかすかに震えていた。

「おれたちでやろうや」

気の弱い高瀬が言った。川村が減速機をどける段取りを始めた。自分はこういう時どうすればよいのだろうと圭介は考え込みながらも、身体だけは所在なげに川村の作業にくっついて動かしていた。

クレーンとチェンブロックを使って減速機がどけられた。幸いにもモルタルは未だ固まっておらず、基礎ボルトは減速機にぶら下がり抜けてきた。ボルトにくっついてむしれたモルタルが箱穴の所でわずかに盛り上がっている。高瀬がスコップを持って盛り上がったモルタルをすくい取り、脇に置いたベニヤ板の上に落とした。

箱穴は二つあった。箱穴の口の大きさは二十センチの幅しかなかったのでスコップはすぐに使えなくなった。高瀬はスコップを放り出すとコンクリートの上に這いつくばった。右手を箱穴に入れてモルタルをすくい出すと、それをベニヤ板の上へ投げた。

川村と圭介の二人が立ったまま高瀬を見下ろしていた。竹峰組の三人は窓際に置かれた木箱の上に腰を下ろして煙草を吸っている。彼らの視線は時折圭介たちの方向に向けられているようであった。

高瀬の右袖はみるみるうちに真っ黒になって濡れた。水をたっぷり含んだモルタルはすくい難いらしく、高瀬の手から落ちて撥ねた。汗の浮き始めた高瀬の額に撥ねの跡が一つ二つと増えていく。

圭介は黙って見ていた。これは設計屋の仕事ではないと思った。余計な作業をして設計屋として物を見る目を曇らせぬよう、河島主任から強く戒められていたのだった。

高瀬は黙々としてモルタルをすくい続けた。それを見ている圭介の気持は崩れないではいられなかった。この仕事は高瀬の仕事でもはいはずだ。そう思った時、圭介はコンクリートに這いつくばっていた。

箱穴に突っ込んだ圭介の右手に水はすぐに浸みてきた。作業服の右袖はたちまちセメントがこびり付いて黒く濡れた。水を含んだモルタルは見かけよりも重く、続けて何度もすくっていると右腕がこわばってくるのがわかる。圭介の顔にも撥ねの跡がいくつも付いた。額から首筋から汗が流れ出し、息が荒くなっていった。

圭介は夢中でモルタルをすくい続けた。自分の仕事は何かなどという考えは頭から消えていた。圭介の肉体はこの時、ただモルタルをすくい続けるためにのみあった。周囲の風景は圭介の目に映ることはなかった。立って見ている川村も全く気にならなかった。隣に這いつくばっている高瀬もどうでもよかった。圭介は心身ともに小型のパワーショベルになりきっていた。

「あまり無理すんなよ」と誰かが言った。夢の中で聞く声のように圭介は聞いた。

突然肩を叩かれた圭介が起き上がって振り向くと、北山が立っていた。

「代わってやるよ」

北山は圭介の前に屈み込んだ。立ち尽くしている川村に北山の声が飛んだ。

「川村さん、あんたも見てるだけじゃなくて少しは代わってやったらどうなんだよ」

ばつの悪いつくり笑いを浮かべて、川村は高瀬の肩を叩いた。北山と川村がモルタルすくいを始め、圭介と高瀬は大きく伸びをした。圭介の右腕は完全に鈍っていた。震えて字も書けないだろうと圭介は思った。

圭介と高瀬はお互いに顔を見合わせると笑い出した。セメントの撥ねだらけの珍妙な顔が二つ向い合って笑っているのもまた珍妙であった。二人の姿が気になりだしたらしく、竹峰たちがちらちらとこちらをうかがっている。

竹峰たちが意を決するようにしてやって来た時、北山も川村も汗びっしょりになっていた。あばた面は圭介たちと同じだった。竹峰が高瀬に言い訳がましく言葉をかけた。

「おれたちよ、何もあんたたちに腹を立てた訳じゃねえんだよ。代わってもいいんだぜ・・・・・・・・」

高瀬は冷たい眼で黙って竹峰を見つめた。いたたまれなくなって、竹峰は北山の肩を叩いた。

竹峰たちがヘドロすくいを始め、北山と川村が起き上がった時、秋山が様子を見にやって来た。

「どんな具合かいなあ……」

何気なく圭介の顔を見た秋山の顔に緊張の色が走った。川村、高瀬、北山と視線を移していった秋山は「おや、おや」と言って口元に笑いを浮かべた。いかにもわざとらしい感じがしらけた空気を誘った。秋山の言葉に合わせる者は誰もいない。モルタルがベニヤ板の上に落ちる音だけが耳の底に刻まれていった。

秋山は圭介たちと並んで立っていた。薄い唇の間に白い歯を僅かにのぞかせた顔は薄笑いを浮かべているようにも見えるが、目は真剣に何かを見つめている。やや赤みを帯びた顔全体が薄く油をひいたように光っている。秋山の耳にもモルタルの積み上げられる音は重く響いているに違いない。

竹峰が最後の一すくいをベニヤ板の上に投げてゆっくりと立ち上がった。

「こんなもんでいいだろう」

高瀬が穴の底を覗き込んで首を上下に動かした。居合わせた者たちも順に次々と覗き込んだ。秋山が最後に覗き込んだが表情には何の変化も見えなかった。間もなくもう一人の男も立ち上がった。今度は秋山だけが覗き込み、高瀬の真似をするように首を動かした。

虫たちは、夜になると壁の中の明るさに魅かれて窓ぎわに集まってくる。そういう虫たちとは逆に、男たちは今、外の明るさに魅かれるようにして窓ぎわにぞろぞろと集まってきた。窓のすりガラスは空の色を映している。へドロすくいの音が消えると、工場内にはアーク溶接の音とベニヤ壁の向こうから響いてくる機械の運転音だけが残った。

北山が木箱の上に腰を下ろしてチェリーの赤い箱を胸のポケットから取り出した。竹峰がその横に座り、ふうーっと大きく息をついた。二人の背後の窓は、黄色からオレンジ色に変わり始めた外の雰囲気을伝えている。他の男たちは腰掛けた二人の前に半円を描くように立った。それぞれに自分の煙草を取り出して口にくわえる男たちの顔は、セメントの撥ねた跡で醜く汚れていた。

誰かが煙草に火をつける。隣の男が自分の加えた煙草の先をその火に押し付けて吸うと火は移る。別の男がまたそれを繰り返す。こうして火は男たちの間を移っていく。

一服の火に乗って何かが男たちの間を渡っていった。セメントで汚れた男たちの顔には笑いこそなかったが、それを超える何かがあった。圭介は自分が暖かい輪の中にいるのを感じていた。輪は柔らかく弾力があり、快い手応えがあった。つい一時間ほど前に自分の居場所が分らずにうろうろしていた、不安の中の自分の姿が虚像のように思い出された。

渡り板の上でライニングを見ていた秋山が近づいて来て、薄い唇の間から歯をのぞかせた。

「ご苦労さんでしたね・・・・・・」

「秋山さんもひでえ仕事を作ってくれるぜ・・・・・・」

そう言ってから北山は圭介の方に向き直った。

「・・・・・・真藤さん、あんたも結構やるなあ・・・・・・」

「・・・・・・」

「おれは手伝う気なんかこれっぽっちもなかったんだけどよ・・・・・・」

「おれだってそうや。高瀬さんの悲愴な顔つきを見とったら何となくその気になってしもうてなあ・・・・・・」

「またまた、そんなこと言うて・・・・・・」

高瀬の顔に笑いが戻った。

「ところで北山さん、こんなことに時間を取られて大丈夫かいな。ライニングの水張りは明後日やでえ・・・・・・」

圭介に応えようとして北山は煙草を口から放し、視線を圭介から川村に移した。

「少し延ばしてもらいてえなあ・・・・・・」

本気ではない北山の雰囲気を感じ、川村は口元をゆるめて秋山のほうを指差した。目は北山の方を向いたままだった。

「あっち、あっち・・・・・・」

秋山は苦笑いした。さきほどとは違って、今度は本当に笑っていた。

秋山もようやく輪の中に入ってきたようだった。

男たちは大声で談笑しながら煙草を吸い終わると、一人二人と自分の仕事に散っていった。鋼管を切って底板を溶接しただけの灰皿から煙が上がり、空の色を映した窓ガラスの前でゆらめいていた。